

# 地ア地研たより

2019年8月8日

No. 47

発行者 有村宏紀

文責 黒瀧善和

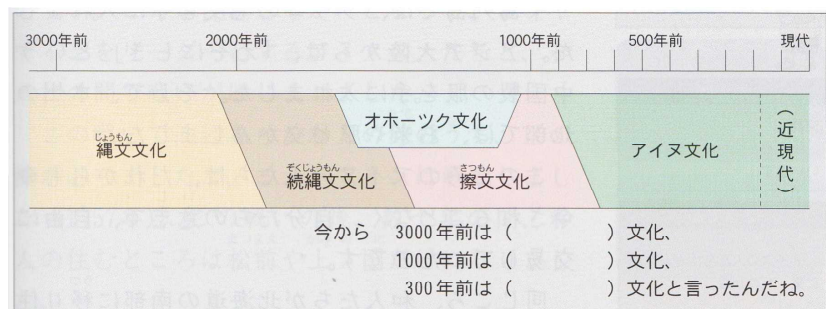
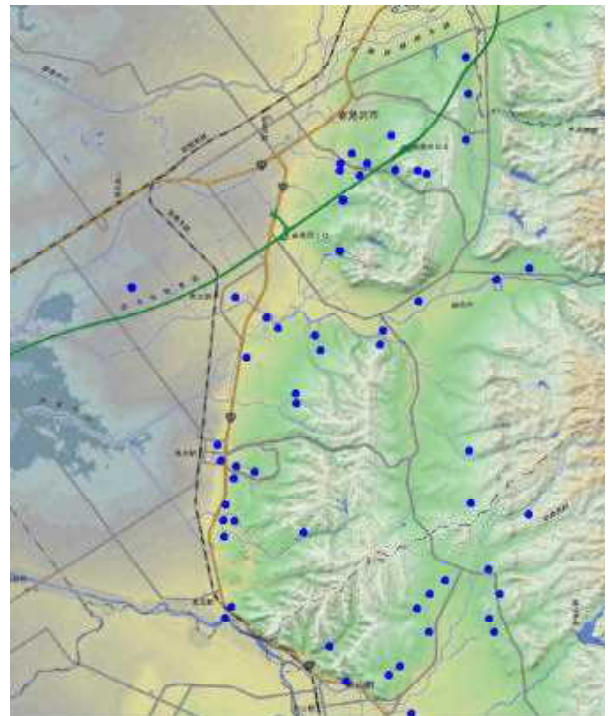
## 北海道150年とアイヌ語地名

昨年は「北海道」と命名され 150 年目ということから、「松浦武四郎」が注目され、アイヌ語やアイヌ地名、アイヌ文化・歴史に対する関心も高まりました。松浦武四郎が残したものは、ホッカイドウという地名だけでなく、当時の生活の様子もつぶさに記録しており、当時生活やアイヌの文化を知るための貴重な資料になっています。武四郎は、「ホッカイドウ」という名前を提案しただけでなく、道内各地の地名の選定も行っています。その際、その土地のアイヌの呼び方を基本としており、道内の地名の大部分がアイヌ語あるいはアイヌ語由来となっています。 ↓遺跡場所

地ア地研では、数年前に夏の探査会で岩見沢北村方面を探査しました。(2014 年) 武四郎はニイルオマナイで宿泊し、ここに碑が建っています。このあたりには、あまりアイヌ語地名が残っておらず、湿地だったため、あまり人々は生活していなかったのではないかと、当時の様子を推定しました。しかし、岩見沢市内の平坦な所には流れのゆるやかな河川がいくつか流れており、アイヌ語の名前が残っていることから、アイヌの人々は地名が残っている辺りで生活していたと思われます。

岩見沢では、丘陵地帯を中心に、石器時代から擦文時代にかけての遺物が多数発見されており、(右図) 標高 30m 前後の所に古くから生活していたようです。今回の夏季探査会では、遺跡を何カ所か巡り、過去の情景を想像しながらの探査となります。

北海道の時代区分は、学校の歴史で学ぶ区分とちがっています。学校で学ぶ区分は、政治の中心地により分けた区分ですが、北海道は明治まで中央政府の主権が及ばない地域が大部分であり、大陸の影響をあまり受けない独自の文化が発展しました。北海道はまわりが海ですが、石器時代から白滝産の石器が道外からも出土しており、



アイヌ民族:歴史と現在 より(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構)

人々が広範囲で行き来していたことが知られています。時代が進み 13 世紀頃は青森県五所川原の十三湊がアイヌとの交易場所でした。

←青森県 十三湖

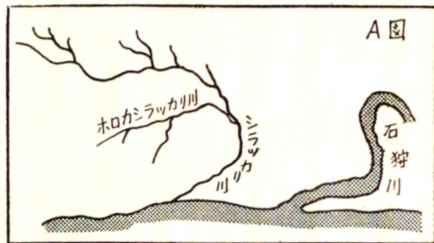
# 地名によく見られるアイヌ語

アイヌ語地名は、アイヌ語でその土地を説明しているの、決まった単語を見ることができます。

- ポン** (本・奔 など) pon:小さい、少ない  
川の名にポンがつけば、大小ある場合、小さい方をポン〇〇、上流部では枝川をポン〇〇という例が多い。
- ポロ** (幌 など) poro:大きい 多い  
「親である」が原義で、川では支流に対し本流を指すことがある。
- シ** si:本当の、大きな
- モ** mo:小さな(並んでいる場合)、  
語源は pon 同様子

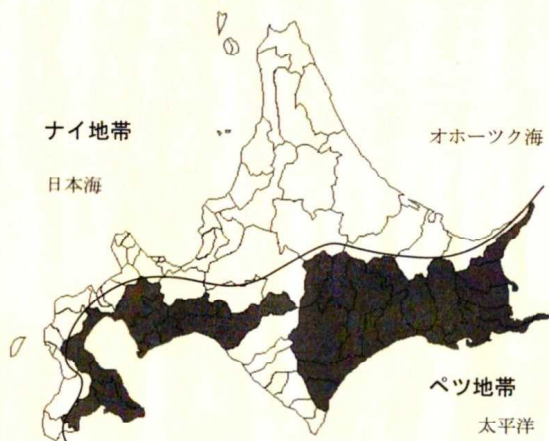
今回の探査会でも見られる「pon」という語です。漢字表記は音を充てたものなので、漢字に意味がなく、ponは本流に対し、支流を指すようです。「poro」はいろいろなどよく見かけることばです。幌内、幌向、札幌、幌別、幌尻などいくつも見られます。同じく漢字では「幌」がつきますが、「幌加内」は意味が異なります。「si」は士別・標津、支笏など、いろいろな字があてられ、「大きな」:シ・コツ(大きなくぼ地)、シユーパロ:夕張川の本流…パンケモユーパロ川より上流部をさす、というように使われています。

**ホロカ** (幌加など)  
horka:◀後戻りする▶上流で向きを変えて海の方へ行っている枝川。川は生きもので、海から上陸して山へ登っていくものと古く、アイヌは考えていたので、川の流れが途中で海の方へ向きを変えているとき、それを horka という語で表した。図(小辞典より)→



シラツカリ川  
知津狩川  
ホロカシラツカリ川  
堀頭川

道内ではたくさんの「ホロカ」が見られます。地名アイヌ語小辞典では、図のように流れが大きく変わり、海の方へ向かっている川について説明しています。図では見事にホロカシラツカリが海の方へ向いています。しかし内陸では、川口や合流部が海の方がよくわかりません。本流から向きを変え、海の方へ行くような感じの川を「ホロカ」としているようです。その川を遡り、途中海へ出たいとき、下流の合流部まで戻らないで「ホロカ」を抜けていたのかも知れません。



北海道の「ナイ」「ベツ」地名の分布  
灰色の部分はベツの優勢地域(ナイ/ベツ比1.00以下)。山田秀三1982『山田秀三著作集』1(草風館)を一部改変。

「アイヌ学入門」 瀬川拓郎著 2015

**ペンケ** pen-ke 川上の  
**パンケ** pan-ke 川下の  
パンケとペンケは、同じような支流が2川あるとき、川下側(川口から遡って手前側)をパンケとして、川上側をペンケと呼んでいます。

**ナイ** (内 など) nay  
**ベツ** (別 辺 など) pet  
両者とも川を表す。北海道の南西部では pet を普通に川の意を用い、nay は谷間を流れてくる小さな川の意に限定している。カラフトでは nay が普通に川の意を用い、pet は特に小さな川を表すと云うが、地名にはめったに現れてこない。  
(地名アイヌ語小辞典 nay の項)

札幌大学教授 瀬川拓郎氏はナイとベツの変遷を下図のように説明しています。変遷にはオホーツク

人の南下と東北アイヌの古墳社会との接触が影響しているのでは、と考えています。(「アイヌ学入門」より)

